



現代の文学 = 20

田地文子集



女坂

ひもじい月日

二世の縁 拾遺

耳環珞

女面

男の銘柄

河出書房新社

現代の文学 20 円地文子集

文子

© 1964

責任編集

川端康成 丹羽文雄
円地文子 井上靖
松本清張 三島由紀夫

昭和39年 4月 5日 初版印刷

昭和39年 4月 10日 初版発行

定価 390円

著者 円地文子
発行者 河出孝雄
印刷者 高橋武夫
装幀 原弘(N. D. C)

印刷・大日本印刷株式会社
本文用紙・本州製紙株式会社
刷貼・神崎製紙(ミラーコート)
同納入・東邦紙業株式会社
クロース・日本クロス工業株式会社
同納入・株式会社 小島洋紙店

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の八

電話東京 (291) 3721~7
振替口座 東京 10802

製本 美行製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

女	坂	三
ひもじい	月日	三
二世の縁	拾遺	一四七
耳	璽	一六三
女	面	一六九
男	の銘柄	二八三

年 解

譜 說

三島由紀夫…… 葵一

挿画 竹谷富士雄
写真 三木 淳

田
地
文
子
集

女おんな

坂さか

第一章

初花

初夏の午後であつた。

浅草花川戸の隅田川を背にした久須美の家では母親のきんが朝からかかつて念入りに掃除した二階の二間つづきの部屋に庭の白い鉄仙の蔓花を入れて、やれやれこれですんだというように片手に腰をたたきながらくらい梯子段を降りて来た。

玄関の隣の三畳の連子窓の下で川から来る明るい水明りに針の目をすかせて、仕立ものの縫糸をおしていた娘のとしは、花畳紙を持って部屋へ入って来た母親に声をかけた。

「今、お隣のボンボン（時計）が三時を打つてよ……」

お客さん、晚いねえ、おつ母さん」

「おや、もうそうなるかい。……どうで宇都宮から乗りつぎの人力車だというから、屋すぎといつても、夕方にはなろうよ……」

きんは茶の間の長火鉢の前に坐つて長目の継羅宇の煙管に火をつけた。

「朝から精出したから、くたびれたでしょ。おつ母さん」

としはにっと笑つて少しほつれた銀杏返しの髷にほそい縫針をすいすいとおしてから、紵台の赤い針坊主にさした。それから膝の上の浜縮緬らしい仕立物をそつと畳紙の上に移して、悪い足をひいて母親のそばへ出た。自分も一休みと思つたのである。

「毎日掃除をしていてもよく塵埃がたまるもんだねえ」きんはたすきをとつた袖口をびんとのばして黒縹子の衿のほこりを潔癖らしく手ではたきながらいう。踏台にのつて欄間から鴨居の長押の溝までさっぱり塵埃を拭きとつたのが、娘には言わないが自慢なのである。

「白川さんの奥さんは、何だつて、東京へ出てみえるんだらうね」

としは掃除には母親ほど興味がないらしく、針仕事につかれた眼のまわりを指先きでもみながらいうのだつた。

「何ったって、お前……」

きんは不審そうに眉をよせて娘をみた。気の若い母親と病身で婚期を過してしまつた娘は今では親子というより姉妹のようなつながり合いでものごとを話しあうのだつたが、時々としの方がきんより年寄じみた考え方をした。

「東京見物だつて手紙に書いてあつたじゃないか……」

「そうかしら」

としは仔細らしく首を傾けていった。

「あの御新造……暢氣に東京見物なんぞに出て見えるかしら……白川さんは、大書記官とかつて、県庁じゃ県令さんのすぐ下なんでしょ」

「そうだよ。大した羽振だつて話だ」

きんはとんとん火鉢の縁で煙管をはたきながらいった。

「出世したもんだよね。前に東京府のお勤めで隣にいた時分じゃあんなになる人とは思わなかつた……もつとも、その時分から、きれる人じゃあつたけれどね」

「だからさ、おつ母さん」

と、としは母親の肩をたたくような声でいうのだつた。

「その忙しい旦那を残して、お嬢さんと女中をつれて一、二カ月がかりの東京見物なんて、何だかあんまり悠

長でおかしいわ。お里があるわけじゃなし……」

「そうだよ……あの御新造も、白川さんと同じ熊本ものだもの……けど、お前……」

ときんは、想像がつかないらしく、娘の顔をまじまじみて、

「まさか離縁ばなしでもあるまい……白川さんからの手紙にそんな模様はちつともないもの……」

「そりやそうでしょうよ」

としはいいながら、占いでもするような眼で火鉢の猫板に頬杖をついている。きんはこれまでにもこの足の悪い娘の予感することが妙にぴったり当るので、時々わが子ながら氣味の悪くなることがあつた。市子の口寄せでもみるような眼でしばらくとしの顔を見ていると、としは頬杖をはずして、

「わからないわ」

と首をふつた。

白川倫が九つになる娘の悦子と女中のよしをつれて、久須美の家の前に傳から降りたつたのはそれから一時間ばかりたつた後であつた。

取りあえず湧かしてあつた風呂に入つて、旅の塵埃を洗い落した後、倫は福島の名産だという干柿や会津塗などの外にきんにもとしにもそれぞれ似つかわしい反物を

土産に持たせて、階下の茶の間へ来た。

絹ものに黒縮緬の五つ紋の羽織をどっしり着て、衣紋つきのいい撫肩の胸を少しそらせるようにして坐っている。倫の様子には四、五年見ない中に、めっきり官員の奥さんらしい容態が具っていた。照りのいい黄味がかった顔色の額が少々ひろく、厚肉の形のよい鼻を中心に眼も口もゆっくり間隔をとって置かれているので、神経質な印象はどこにもなかったが、はれた臉の下におかれたように細く見ひらかれている眼には、ちょうどその臉を蔽いにしていろいろな表情の流出を、食いとめていような一種のもどかしさがあった。白川夫婦が東京に居たころ二年近く隣家に住まって懇意になっていながら、きんなどが倫に気の置けるところのあるのもその重たい眼ざしと崩したところのない言葉つきや動作のせいなのであった。それは、勿体ぶっていると、意地の悪いとかいうのとは違っている。で、批難しかねるのだったが、江戸っ子のきんに簡単にいわせれば、気のさばけない人でもないのだからか。しかし若い時よりも良人の地位が重々しくなった今では、倫のそういう堅くるしさもなかなか貫目があった立派に見えるときは思った。

悦子はまだのび揃わない髪をお煙草盆にゆって、眼なれない川の眺めが珍しいらしく連子窓の方へばかり眼をやっていた。

「大そう奇麗におなりになりましたねえ」

ときんがお世辞でなしにいったほど悦子は色が白く中高の美しい顔立ちだった。

「お父さまによく似ていらっしゃる」

ともしもいった。ほんとうに悦子の頬の肉のうすい品のよい顔や首の長い身体つきは倫よりも白川に似ていた。倫は悦子にはこわい母親であるらしく、

「悦」

と倫が一声低くよぶと、悦子はすくんだように母の傍へ来て坐った。

「よく思いたって出ていらっしゃいましたこと。旦那さまも県令さん同様の御威勢だといえますから……奥さまのお心づかいも大変でござんしょう」

ときんはせかせか煎茶をいれてすすめながらいった。

「いいえ、もう私どもお役向きのことは一向わかりませんので……」

と倫は口鬱なについて、白川さんは県ではお大名暮らしだそうだとときんが人の噂にきいている羽振のよい自慢話などは、穂も見せなかった。

盛り場の開けた話だの、髪形の少し見ない中にちがったことだの、新富座の芝居はどんな狂言を出しているかだの、東京を中心の世間話にしばらく花が咲いた後で倫は、

「私も、今度はゆっくり遊んで来いとゆるしが出ましてね……まあ、その中には少し用もまじっていますのですけれど……」

といって、傍にいる悦子の髪の毛の赤い櫛をちよつとさし直した。何げない言葉つきだったのできんは少しも氣にならなかつたが、としはやっぱり何か倫が大切な用事をもっていることを感じた。しつとりと落ちついてふるまっている倫の身体に何か常でない鍾が沈んでいるように見えた。

その翌日出不精などしが、昨日の土産の礼心に悦子を観音さまの御詣りに誘うと、よしも悦子も喜んでつれ立って出かけた。

「帰りに仲見世で絵草紙でも買ってお上げよ」

ときんは娘にいつけて門まで送つたが、その足で二階へ上つてゆくとき倫が次の間に坐つて持つて来た葛籠から衣類を出し入れしていた。白い雲のちらばっている空が川水に映つて、倫の坐っている二間つづきの座敷も白っぽい明るさにひろびろしていた。

「まあ、早速に、御精が出ますこと」

といいながらきんが縁側に膝をつくとき、倫はゆっくりした動作で着物を一枚一枚葛籠に収めながら、

「悦が大きくなったので、あれを持つてゆくこれも持つ

てゆくなど申して……旅をするにもめんどうになりました。……あの御隠居さん……いま御用はおありでしょうか」

といった。丁度膝を立てて葛籠の中へ悦子の黄八丈の袷を沈めるようにおいている時なので倫の顔は見えなかつた。きんはもとより世間話をしようと上つて来たのであつたが、倫にそういわれると何だか上つて来たのがきまりの悪いような気分になつた。

「いいえ……奥さま何か御用でございますか」

「いえ、お忙しければ、今にも限らないのですけれど、悦が出かけておりますし……まあ、ちよつと、こちらへおいで下さいまし」

倫はやっぱりゆつたりした調子でいって、座敷の縁に近いところへ座布団をもつて来た。

「あの……実は今度の滞在中に、是非あなたに御骨折願ひ度いことがございますのです」

「おや、何でござんしょう。私のようなものでお問にあいますことなら、何でもいたしますけれど……」

きんは勢よくいつてみたけれど、倫の行儀よく膝に手を置いて伏眼になっている顔から何を語り出されるのか想像は出来なかつた。倫のゆっくりした長めの類のはずれから口尻にかけて、うっすら微笑んでいるらしい微かな線が浮んでいた。

「妙なお話しなのですよ」

と倫はちよつと鬢びんの当りへ手を上げながらいった。身だしなみのいい倫の髪の毛はいつもきれいに取上げられているのだったが倫は一筋のみだれ毛をも見苦しがつて時々髪を撫でて見る癖があった。

何か女についてのことらしいときんはその時気づいた。白川は東京にいらるころにも女出入が多く倫が心配したことをしてゐるので、いまのような地位になり登れば猶更なほさらそういう事柄はあるに違ひなかつた。でもそういう内情を推察したように立入るのは、都会人のエチケツトに反してゐるのできんはやっぱりおぼおぼしい表情をつくつていた。

「何ですか、どうぞ、御遠慮なしにおっしゃつて下さいましよ」

「ええ、どうせお頼みしなければならぬことですから……」

倫の口もとにはやつぱり女面おんなおもてのようなほのかな笑いが漂たなつていた。

「あの実は、小間使を一人抱えて帰り度いのでございませう。年は十五から十七、八ぐらい……出来れば堅い家の娘で……縹緞きりうさのいい子でないと困ります」

終りの言葉をいった時口もとの微笑がはつきりして、厚い瞼の下まぶたの眼がその笑いと凡そふさわしくない生真面きまへ

目な光を湛たたえた。

「ああ、なるほど……」

そういつた自分の声がいかに軽薄に聞えて、きんは下を向いた。それだけきけば先日としの予感したことははっきりのみこめるのだった。

うなずくとも溜息ともつかず息を深く吸つてからきんはいった。

「やつぱり、もうああいう御身分におなりなさると……そういうものが要りますんでしようねえ」

「どうも……やつぱりねえ、端はなが承知いたしませんのですねえ」

それは嘘だった。倫は胸の中に噴き上げて来る感情を力一杯おさえつけおさえつけていた。

夫が妾めかけを新しくかかえようとしてゐるのはもう一年ほど前からの計画だった。白川にとり入つてゐる下役達は倫が酒の席などにいるとよく、

「奥さん、このくらいのお邸やしきに、お腰元が不足していませんな」

とか、

「大書記官も多忙すぎますよ。ちつと変つた枕で楽寝をさせてお上げなさい」

とか立入つた口をきいた。部下に甘くみられる事の大嫌いな白川が、妻にそういうことをいう時だけ、それら

の無遠慮な男達をたしなめもしないのを見ると、倫には夫が彼らの口をかりて自分に相談をかけているのだと思えた。

女にかけては放埒な白川を倫はもうこの年までによく知つてい、結婚して数年のような純な愛情は夫に持てなかったが、それでも敏腕で男ぶりのよい白川は倫には十分魅力のある良人であつた。

細川藩の下級の武士の家に生れて維新前の混乱した秩序の間で教育も芸ごともし碌々身につけず早く結婚してしまつた倫には今の良人の位置にふさわしく交際や家政をとりさばいてゆくのはなかなかの仕事だつた。でも氣象の烈しい倫は夫と家とを大切に思う道徳できびしく自分を縛つて、誰れからも非をうたれないように油断なく家事に心をつかつて暮らしていた。倫とすれば一ぱいの愛情と知恵が夫を中心とした白川家の生活につめこまれていたのである。

それだけに倫は年よりもふけていた。美人ではないが十人並みの縹緲で、身だしなみもよい方だつたから、特に年寄じみているわけではなかったが、性来の堅い気性なの責任をいつも重く荷なつていたので、年増盛りの女に見られる熟れた肉感など葉にたくもなく、白川からみれば十以上も若い筈の妻が時に姉のように見えて驚かされることがあつた。もっとも倫のそうした厚い表皮

の下には熱い血が油火のように強く燃えていることも白川は誰れよりも知つていた。白川はそういう倫のおさえな情熱にほてりを感じる時があつた。それは明らかに自分達が生れ育つた中九州の照りつける容赦のない夏の陽を連想させた。まだ山形に勤めているころ、夏の夜どうしたことがあつた。ふとめざめて白川は浴衣の胸のあたりに、冷りと水のような感じをうけた。おかしいと思つて手をやるとその冷たさがするすると滑り出した。

白川が声を立てて飛び起きると、倫もおどろいて身を起した。枕もとの行灯を引きよせて、火皿を向けると、夫の肩に黒い紐のようなものがぬらりと光つてたれていた……

「蛇!」

と白川が叫んだのと、倫の手がのびて夢中にその生きている紐を掴んだのと一緒だつた。

倫は白川ともつれるように縁へ出て開けてあつた雨戸から、庭にそれを投げた。倫の身体はふるえていたが、寝間着の衿のはだけた胸にもあらわにした手にも、いつもの倫が封じて見せまいとしていた生々しさが逞しく匂つていた。強気な白川は、

「何故捨てる……殺してやるのに……」

と倫を叱つたが倫の情熱を感じながら、白川にはもう

そのころから倫が愛情の対象にはなりにくくなっていた。自分の強氣の一枚上をゆく強さが倫にあるのが、けぶたくなじめないのだった。

「妾というといやに表立つが、お前にも小間使だ……よく仕込んでお前が交際で外へ出るような時にも安心して委せて置ける性質のいい若い女がうちにいるのもいいじゃないか。だからお前は芸者などうちへ入れて風儀をわるくしたくない。お前を信用してお前に一切委せるから、若い……出来るならおぼこな娘がいい、そういうのをお前の眼鏡で探して来てくれ。費用はこの中から使ってくれ」

そういつて白川は、倫のおどろいた程大枚の金を目の前に置いた。

いままで他人の口からいわれている時はきかぬ振で通していた倫も、白川からそう口をきられるともうどうすることも出来なかった。自分がこの役目を断れば夫は恐らく勝手に自分で選んだ女をうちへ引き入れるであろう。「お前の選択に委せる」という言葉の中には白川が家の為に倫の立場を重くみている信頼が含まれているのである。その奇妙な信頼を重く胸にしまって、倫は東京見物を楽しんでいる悦子やよしをつれ人力車にゆられ通して久須美の家まで運ばれて来たのだった。

「ようございます。私の懇意な女の小間物屋にそういう口入れをよくする人がござんすから、早速、頼んで見ましょう」

きんは倫の心の奥の重さにはいい工合にふれて来ず事務的に話を運んで行った。蔵前の札差の分れだという家に生れて、旧幕時代の大きな町人や武家の氣風をいつているきんには、男は出世すれば妾の一人や二人持つのは不思議でもなんでもなかった。かえって家の盛って行く現われのように奥さんも嫉妬半分、少しは得意も交っているだろうぐらいいきんは想像していた。

それゆえ夜になって、娘と二人床へ入ってから、まだ氣を置くように声をひそめて、ちらちら二階へ眼を走らせながら、そのことをとくに話した時も、

「氣の毒だねえ」

という娘の沈んだ声にむしろびっくりしたくらいだった。

「あの御新造……お母さんはしばらく見ない中に貫目がついて立派になったというけど、私には苦勞の貫目みたいに見えるわ。うちの格子があいて、入って来た顔を見た時、私、ああと思ったもの……」

「福のある人には、それだけの苦勞もついてまわるものさ……」

と きんは こと なげ に い っ た。

「まあ、何しろ、性のしれた、氣質のいい娘を世話して上げたものだ。旦那は生娘がなければ、半玉でもいい、すれていない女ならいいっていいなさったそうだけれど……」

どの部屋もひんやり静まって大寺の庫裏のような県庁の官舎から出て来てみると、隅田川のひろい水の眺めが眼の前にあって、船の艫を押しきる音や川波のゆれるそよぎが一日中耳についているこの家の二階はひどく陽気で幼い悦子の氣に入った。よしが用をしている間悦子は裏木戸から棧橋へ出て足もとの杣をゆすっている水のゆるやかな動きを眺めたり、忙しそうに漕ぎすぎてゆく荷船の船頭の威勢のよいかけ声に耳をとられたりしている。そんな時、連子格子の間からとしの青白い顔がのぞいて、

「お嬢ちゃん、氣をつけてよ、落ちちゃいやですよ」

と声をかける。今日もきんは倫と一緒に出かけているのである。

「大丈夫よ」

と悦子は、ふり向いてにっと笑う。年より大人びてみえる細面の整った顔に、紅の切れをかけた小さい髷が可愛かった。

「お嬢ちゃん、いいものを上げるからいらっしゃい」

「ええ」

と素直にいつて、悦子は紅い縞のたもとをゆらゆらさせて、窓の下へ来た。連子の下の狭い土を軟かくならして、きんの丹精している朝顔が五、六本細い竹にからみついて蔓をのばしていた。外からみると窓の中のとしの顔もひろげている縫物も悦子にはうちでみるのと別のように見える。としは連子の間から瘦せた手を出して、指先きにつまんでいる紅絹の小さいくくり猿を悦子の眼の前でふらふらふってみせた。

「奇麗ねえ」

と悦子は連子に両手でつかまって、うれしそうに糸の先きの小さい猿をみている。その顔があどけなくほころびているのでとしは、この子はお母さんがいないでも淋しがりやだと思ひ、ひとりであなずくのだった。

「お母さま、どこへいらしたの」

くくり猿の糸をふらふらさせている悦子にとしはきいてみる。

「御用……」

と悦子ははつきりいう。

「お嬢さん、お母さまいらっしゃらないと淋しいでしゅう」

「ええ……」

といったが、眼は活々冴えていて、

「でもよしやがいるから……」

「ああ、そうね、およしさんがいますものね」

としはうなずいてみせた。

「お国にいらしてもお母さま御用が多いの？」

「ええ」

と又、悦子ははっきりいった。

「お客さまがあるの……」

「大変ねえ、お父さまはお出かけが多くって？」

「ええ、昼間はずっと県庁よ。夜もお招かれがあったり、おうちへお客が来たり、私、お父さまと一日あわな

いことよくあるの……」

「そう……女中さんは今幾人おいでなの」

「三人……よしやとせきやと、きみやよ、それに馬丁と書生……」

「まあまあ大変な御家内ね。それではお母さまもお忙しい筈ですわ」

としは針の目をとめて微笑んだ。この滞在の間に倫が探し出してつれてゆく女のことや頭に浮び、それは悦子の境遇にも何か変化を与えるかもしれないように想像された。

としと悦子が話しあっているところ、倫ときんは柳橋の卯月という船宿の二階で男芸者の善好を相手に話してい

た。

倫を主人にして、きんはすっかりへりくだっていた。

善好は旗本崩れだけにさばけた中にも賤しいところのないきりりとした男で昔なじみのきんとは商売をはなれた口のきき方だった。

「そうですね、お話をうかがうと、なかなか難かしいね。

まあ、もう少しすると、四、五人。縹緞のいい子が来ますかね……」

ちよつともち扱った形に、善好は銀の細身の煙管をくると指のさきでまわした。腹の中では、どこの国に妾を本妻にさがさせる奴があるもんか、国ものはこれくらいやだと舌うちしているのだったが、向いあっている倫の権高いというでもなく、愛嬌があるというでもなく、どこに変った一節もないなりに、嘲弄したり、しゃれのめしたりする事の出来ない窮屈なところが、善好の中に残っている伝統的な矜持にどこか合うのだった。

「私達の眼でみていいと思っても殿方のこのみがありますものねえ、奥さま」

いける口のきんはさされた猪口を善好にかえしながら倫の方をみた。

「いや、私なんぞのこのみも余り当てにはなりませんぜ。このごろの前髪を揃えて切って女唐傘をさした女の学生なんぞ……どうもね」